

古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年 3月24日

開催日	平成28年 3月24日	時 間	10:00～12:00
場 所	新区民活動センター A 会議室	出席人数	14名
講 師	真田雅行氏	作成者	山本 千鶴子
テーマ	第二学習 奥の細道③		
概 要	<p>(須賀川→浅香山→黒塚の岩屋→福島→しのぶの里→月の輪の渡し→瀬の上の宿→丸山→飯坂→桑折の宿→伊達の関→白石の城下町→笠島→岩沼)</p> <p>・白河の関越えでは長旅の疲労と風景の美しさと故事に心を奪われたが、奥州一の俳人等躬(とうきゆう)にどう過ごしたかと尋ねられて次の一句詠む。</p> <p>○風流の 初(はじめ)やおくの 田植うた (自分はこれから陸奥の名所・旧跡を探ろうとしているが、その陸奥で初めに味わう風流はこの鄙びた陸奥の田植歌から始まった)</p> <p>等躬宅で披露したこの句を発句にして等躬・曾良と詠み続け、連句が出来上がった。この宿駅の傍らに大きな栗の木陰をたよりにした隠遁僧がいて、西行が「とち拾うほど」と詠んだ境地もこのようであったかと思われた。</p> <p>○世の人の 見付けぬ花や 軒の栗 (地味で目立たない栗の花は人の目に止まらないが、その栗の花を愛でて軒端に咲かせているこの庵の主人の隠遁生活も奥ゆかしい)</p> <p>・等躬の家を出て五里程行くと浅香山が有り沼も多い。どの草を歌によまれた「花がつみ」というのか、と尋ねまわるうちに日も暮れたので、黒塚の岩屋を見て福島に行き泊った。</p> <p>・翌日は「しのぶもじ摺り」の石を尋ね、村の子供にその石のいわれを教えてもらう。</p> <p>○早苗とる 手もとや昔 しのぶ摺 (早乙女たちが田植をしている手つきを見ていると、しのぶ摺りをした手つきもあのようなものであったろうかと昔のことが偲ばれることだ)</p> <p>・阿武隈川の月の渡しを越えて瀬の上の宿場に出た。佐藤庄治の旧跡や古寺にある佐藤兄弟の石碑にあわれを覚える。寺には義経の太刀や弁慶の笈も蔵されていた。</p> <p>○笈も太刀も 五月にかざれ 紙幟(かみのぼり) (五月の節句の時期なので紙幟を立て宝物の笈や太刀を飾ってはどうか)</p> <p>・その夜は飯坂の温泉に泊まったが貧家で夜具も燈火も無く、雨漏りや蚤や蚊や持病で寝られず、夜明けと共に出立し馬で桑折(こおり)の宿駅に出る。辺鄙な田舎の旅路の途中で死ぬも天命だと覚悟し、気を取り直し足どりも確かに伊達の大木戸を越す。</p> <p>・白石の城下町を通り笠島に入る。五月雨で道が悪く疲れていたため、藤の中將藤原実方の墓は遠くから眺めながら通り過ぎ岩沼に泊った。</p> <p>○笠嶋は いづこや月の ぬかり道 (さみだれの季節にふさわしい笠島はどのあたりかと行きたいものの、この五月のぬかるみ道ではどうにも仕方がない)</p> <p>・武隈の松にちなむ能因法師のことを思い、何代もの変遷を経て大木になっていた。</p> <p>○桜より 松は二木(ふたぎ)を 三月越シ (江戸出立の折に拳白が餞別の句を贈ってくれた桜の頃から、心待ちにしていた武隈の二木の松を三月越しに今ようやく見る事が出来たことだ)</p>		
次回予定	平成28年 4月14日 10:00～12:00 於: 新棟リハーサル室 第一学習 赤井村石井家文書④		